

# 「我が人生思い残すことなし」第3章

きたごう はると  
作：北郷 遥斗

※ 第1章、2章のあらすじ = 昭男は大東亜（太平洋）戦争において入隊し、「御国」のために命を捧げる事を夢見る模範的な軍国少年だった。しかし無残にも日本は敗れ原爆や空襲でおびたしい人々が犠牲になった。そんな中で父は失踪し、母や兄弟達は原爆に遭遇した。茫然自失となり、絶望の淵から昭男は少しずつ戦後復興と共に新たな人生を歩み始めるが、心に空いた大きな穴は埋まる事はなかった。それは自分が死に損なった事への絶望と屈辱のなにものでもなかった。やがて年を重ね、子を持ち孫ができ、その成長を実感しながら、自分の人生は一体何だったのかを考えさせられた。そんな時、孫の雄大の「世界」に向けて「平和」を訴える姿に頼もしさと安心感を覚え、自分の人生にようやく確信を持ったのである。 =

（尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 [www.kyodo-keiei.co.jp](http://www.kyodo-keiei.co.jp)）

## 1. 通夜

平成13年3月18日。雄大は、妹はるかとは神戸の父大志の実家に来ていた。大志の父、つまり雄大たちの祖父昭男がその激動の生涯を終えたのが前日の3月17日。奇しくも56年前、神戸の大空襲があった日だった。今日はその通夜の席に駆け付けていた。

時は2001年。1月には世界中でミレニアム（千年紀）のイベントが催され、新世紀を迎えていた。雄大の母京子はパートの仕事で生計を立てていたため何日も休む訳にはいかず、一緒に来る事はできなかった。しかも3月は年度末で経理の仕事は1年に1番多忙な時期を迎えていたのでなおさらだった。「じゃ向こうのおばあちゃんたちによろしくね」「はるかをお願いね」「雄大はもう大人なんだから大丈夫よね」「お線香のあげ方分かる？」と心配性の京子は矢継ぎ早に語りかけた。「分かってるよ。大丈夫だよ」雄大は面倒臭そうに返すや否や、「じゃ着いたら連絡するから」と言い残すととはるかと共に家を後にした。雄大は1年のアメリカ留学ののち、札幌に帰って来て、地元の大学に復学していた。4月からはいよいよ4年生なのだが就職はまだ定まっておらず、活動はこれからだった。



はるかとは2人で神戸の父の実家に出掛けるのは今回で2回目だったので、道程に不安はなかった。前回は5年前、あれは父が居なくなった年で、夏休みに遊びにおいでと呼んでくれたおじいさんとおばあさんが関西空港まで迎えに来てくれた。でも今回はそうはいかなかった。千歳空港に着くと「お兄ちゃん、おみやげ何がいい？」とはるかが聞いて来

（次ページ）

て「何でも。お前の好きなのでいいよ」「俺、搭乗手続きしてるから見ておいで。終わったらゲートの前のシートで待ってるから」「分かった。じゃ私のかばん渡しとくね」そう言ってはるかは店のある方へ向かって行った。「無邪気なもんだなー。遊びに行く訳じゃあるまいし。高校生といってもまだ子供だ」雄大はあきれながらも悪い気はしなかった。関西空港に着くまでずっとあれからの事を考えていた。おじいさんは表面的には普通に接しながらも、いつもどこかずっと遠くを見ていた様なそんな気がした。それが何なのか。戦前の時代を15歳まで生き、価値意識も人格形成もほぼ固まり、いよいよこれからという時に自分は何も行動できず、結果を得ないまま終戦。アメリカから180度違った世界を強いられ「英雄」だった人は罪人となり、「国賊」だった人は無罪となった。何もかもが逆さまとなって、自分が生きている事さえ正しいのかも分からぬまま「高度成長」に引きずられ、時を過ごして来ただけなのだろうか。雄大は考えれば考える程、祖父昭男の人生をもっと知りたいと思った。雄大とはるかは関空から陸路で電車を乗り継ぎ神戸の祖母宅に着いた。「こんにちは」玄関を開け中を覗き込む様に雄大が声を掛けた。呼鈴はない。「こんにちは」後から続けてはるかが声を掛けた。「はい」中からおばあさんが姿を見せた。美子おばあさんではない。「こんにちは。山本雄大とはるかと言います」「あー



札幌の……。大志くんの子供たち？いやーよう来たなあ。遠かったやろ。あ、そや。私な、高橋高子と言います。みんなから高々ばあさんと言われてるねん。亡くなった昭男おじいさんの妹。大志父さんのおばさん。よろしくな」「はい……。初めまして。よろしく申し上げます」雄大が答えた。「今な。誰も居ややはらへんねん」「みんな近くの式場の方に行ったはるし、一緒に行こか？」「おばさんも今出るとこやし。荷物だけ置いといたらええ」勧められるままに雄大たちは従った。

式場に着くと真っ先に美子おばあさんが出迎えてくれた「いや〜雄ちゃん、はるかちゃん。久しぶりやなー。疲れたやろ。お昼ごはん食べたか？お母さん来られへんで残念やったなー。ちゃんと聞いてるし、心配せんでええで」美子は相変わらず一気に語り掛けた。「こんにちは」とまた見慣れないおじいさんが近付いて来た。「あ。こちらな山本耕造さん。おじいさんの弟さん。お父さんのおじさんや」「はい。よろしく申し上げます」雄大は少し堅くなった。「これ、おみやげです。みなさんでどうぞ」とはるかがいいタイミングで紙袋を差し出した。「あら。それはどうもおおきに。わざわざご丁寧に」「じゃ早速仏さんにお供えしとくな」「ま、そしたら早よ上がり。遠慮せんと。おじいさんの顔見てあげて。最後やし」そう言うと美子は二人を奥の間に案内した。